

小関清明先生哀辞

放送大学高知学習センター長 渡邊 輝道

八月二日に先生の訃報に接したとき、最初に頭にうかんだことは、また先生とすれ違いになったという思いだった。

先生は昭和五四年三月に高知大学を定年退官され、私は入れ替わりに四月から高知大学人文学部国文学教室教官として赴任してきた。そして、今年、三月に私が定年を迎え高知大学から名誉教授を与えられ先生と同じ席に連なつて間もなく、先生はその席を立つて行かれたのである。

先生の高知大学での最後の御仕事は、みづからのと、同時に転出することになった三角洋一講師（現東京大学教授）の後任とを教室主任として選定することであった。

人選経過は知る由もないが、当時私が住んでいた茨木市まで面接においでいただいたのは、冬の寒い日のことであった。前日先生からの電話で、お互い面識もないこととて時刻の確認と国鉄茨木駅の改札を出たとき、白いハンカチをポケットから出すのを目印にしてほしいとのことであった。定刻に改札を出てくる人を注視していると、一人の年配の方がまったく素知らぬ振りで前を向いたまま、ポケットからそつとハンカチを引き出されるのが眼にはいった。小関先生の第一印象は含羞の人であった。駅から拙宅まで交通が不便であるため近くの喫茶店で面接を受けることになったが、話が一時間にも及ぶと、私のよく知っている店だと申し上げても「店にわるいから」といつて、別の店に移ることになった。第二印象は気遣い、遠慮の人であった。

ご退官後も週に一度非常勤講師として出講していただいていたが、数年後、ちよつとした行き違いがあつたら

しく、どうしても辞めるとおっしゃって、どうお願いしても、頑として出講いただけなくなった。しかし、その後数年の間に永田哲夫教授が亡くなり、東辻保和教授が転出されて若年化した国文教室にとって、週に一度もおいでいただいてその温顔に接し、なにかと相談にも乗っていたことがなによりも心強いことであつたので、折にふれてお願いをくり返したが、再び出講が叶うのに数年を要したのである。先生も土佐人特有の頑固さを強く持つておられることを知らされた一件であつた。

先生はどちらかといえば寡黙の人であつたが、とりわけ自分の身上をお話になることは少なかつた。旧制高等学校の出身者はその時代を懐かしんで武勇伝を語る人は多いが、蛮勇で鳴る高知高等学校の出身でありながらエピソードのひとつも先生が話されることはなかつた。昭和一五年から終戦までの兵役体験についても、わずかに万葉集を背囊に忍ばせていったということと、米兵が捕虜になつた時、英語が話せる者がなく「おまえは帝国大出身者だから通訳できるだろう」と指名されて弱つたと苦笑されたことくらいであつた。また、昭和四〇年代の学園紛争についても一切触れられることはなかつた。騒動や争いごとは先生の忌避されることであつたと拝察される。

復員後高知にもどられた先生はしばらく教壇に立とうとされず、そのころ高知高等学校におられた大学の先輩である石津純道、松村誠一両教授の強い懇慫によつて、やつと高知師範学校の教壇に立たれることになつたという。先生の中に残る戦争の傷跡の深さはそれを容易に話されることがないだけに思いやるしかない。ただ、平成元年の春の叙勲に際し先生は勲三等旭日中綬章をお受けになつたが、(東京での授与式には出られなかつたため、高知大学の学長室での授与になつた) 関田学長が勲記を読み、勲章を首に掛けられた時、先生は緊張のあまり顔面蒼白になり、身を震わせるようになつたのを側で拝見して、先生の心中を窺がった思いがしたのだつた。も

ちろん、叙勲は先生の高知大学での教育、研究の功績に対して与えられたものに違いはないが、私は、その時先生の胸中に一番色濃く思い起こされていたのは、天皇の命によって不本意ながらも体験することになった兵役期間の思い出ではなかったかと思うのである。

先生は、江戸期土佐の生んだ国学者鹿持雅澄とその著『萬葉集古義』を中心にした萬葉集研究をライフワークにされ、その面での第一人者であった。御退官後の昭和五七年〜五九年にかけて先生が中心になられて『萬葉集古義』の現存稿本の影印版の出版が実現し、学会に寄与すること尽大であった。また、平成四年にはそれまでに発表されていた諸論考に新稿を加えた『鹿持雅澄研究』を上梓された。資料の博搜、テクストの正確な読み、そのうえでの厳密な考証に基づく創見に満ちているこの書が、今後の鹿持雅澄研究の基本文献になることは間違いない。この書にはその年の高知県出版文化賞特別賞と高知出版学術賞が与えられた。賞の授与式での先生の照れを含んだ晴れやかなお顔は忘れられない。

常に温厚な先生もこと学問研究となると厳しい面を見せられ、特に鹿持雅澄関連の他の論考などには厳しいチェックが入った。原文の万葉仮名が正しく訓めていないと慨嘆される時は、いつも興奮ぎみで珍しく多弁にいられた。

そんなお姿もこれからは見ることができない。

先生の学恩に深謝し、ご冥福を心からお祈り申し上げます。